

高知大学 農学部 ニラにおける共同試験

2012年6月12日 撮影



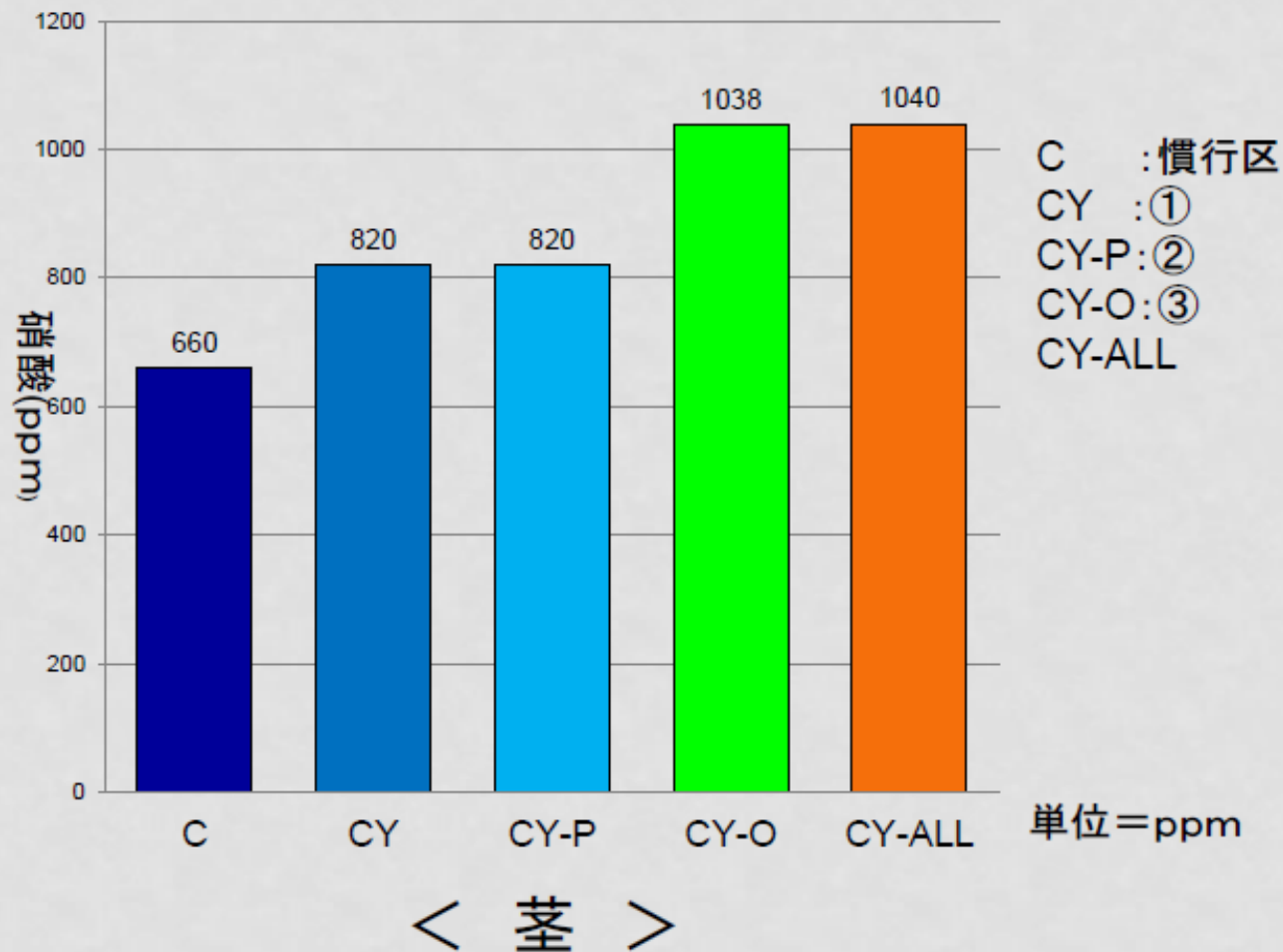
左:高知大学 準教授 山根信三氏
右:高知大学 窪川聖也氏



LEDライトの様子

植物体内の硝酸イオン濃度＜茎＞分析結果

2013年 高知大学農学部



植物体内の硝酸イオン濃度＜葉身＞分析結果

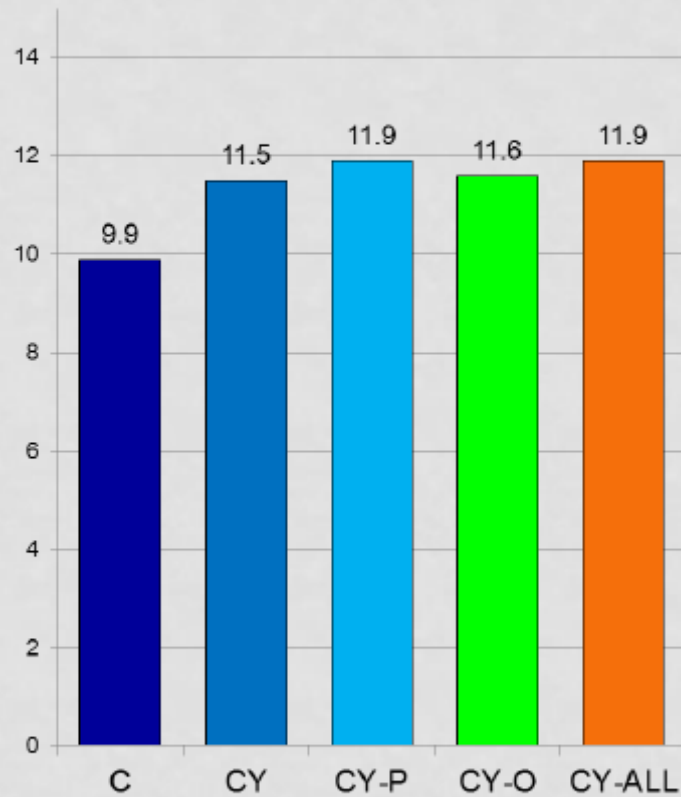
2013年 高知大学農学部



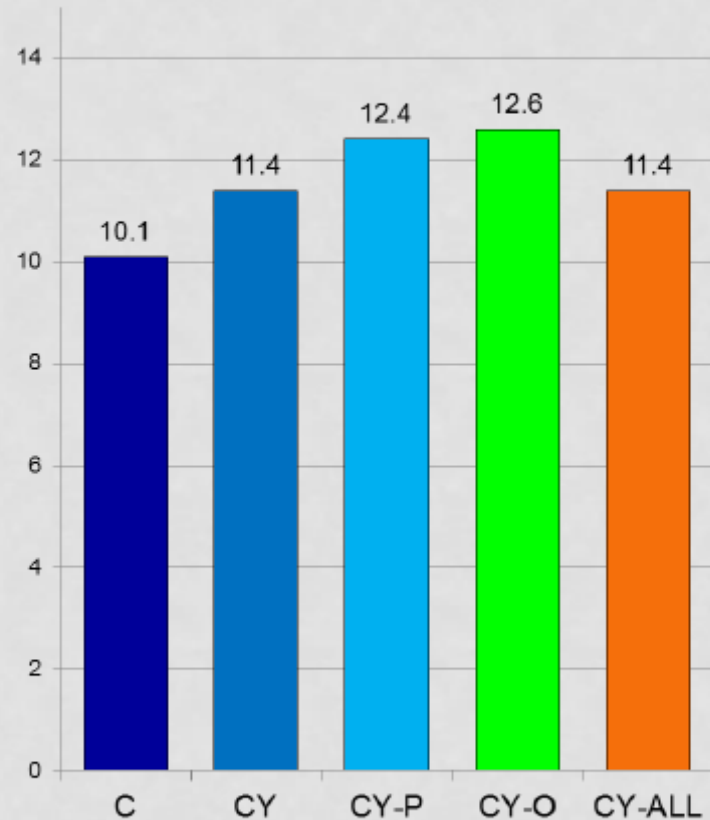
- ・②を施用したCY-P区とCY-ALL区では、植物体内の窒素濃度が低減し、窒素代謝が活性化している。
- ・③を施用したCY-O区では、植物体内の窒素濃度が高く、肥料の吸収能力が高まっている。

Brix (％) 分析結果

2013年 高知大学農学部



< 刈り捨て >



< 最終調査 >

TR比 結果

2013年 高知大学農学部

$$\text{TR比} = \frac{\text{地上部 (Top) 乾物量}}{\text{地下部 (Root) 乾物量}}$$



C : 慣行栽培

CY-P:

・①及び②

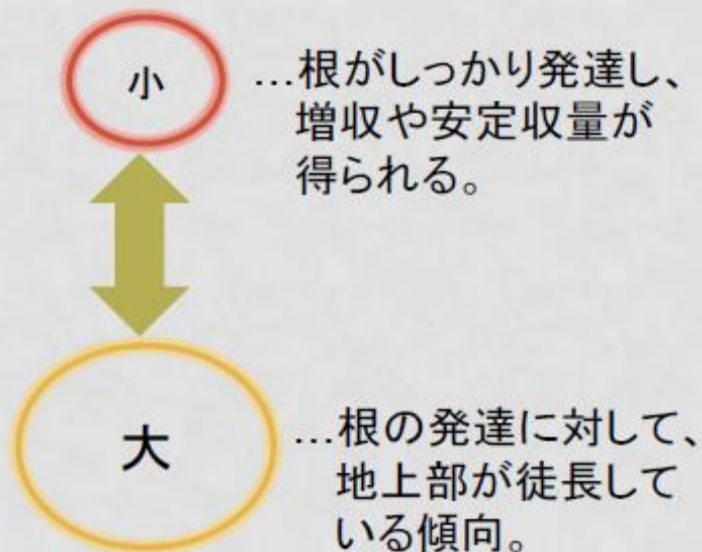
を定植1ヶ月後から2週間毎に施用。

※調査は定植1ヶ月後から1回/月、行った。

TR比 結果

2013年 高知大学農学部

$$\text{TR比} = \frac{\text{地上部 (Top) 乾物量}}{\text{地下部 (Root) 乾物量}}$$



高知大学コメント

慣行区に対し、セル区では有意にTR比が低い傾向がみられた。これは、①及び②等施用により地下部が発達したことが要因であると考えられる。

※セル区...①及び②を2週間に一度の間隔で葉面散布。